

2017年(平成29年)2月 中区制90周年 特別号

## “シビックプライド”を胸に

### 中区制90周年・開港記念会館100周年



未来へ向けて中区全体で盛り上がる1年に

横浜の中心に位置する中区は、今年10月1日に区制90周年を迎える。また、開港記念会館も7月に100周年とあって、今年が中区にとっては節目。記念事業実行委員会(平山正晴委員長)では、様々な取り組みを予定しており、中区全体で盛り上がりを見せる1年となりそうだ。

区民をはじめ地元企業や各種団体で一昨年12月に立ち上がった中区制90周年・開港記念会館100周年記念事業実行委員会では、「シビックプライド(中区に対する誇りや愛着)の高揚」と「未来志向」を目的に掲げ、3月11日と12日の「三塔の日」をスタートに、1年を通して様々な記念事業を企画している。

### 100周年への契機に

実行委では、区役所(行政)だけでなく、中区に関わるすべての団体・機関・企業・施設などが一緒にたつて90周年を祝い、記念事業に関わっていくことで、中区に対する意識を高めていくとともに、「地域愛および協働・自治意識を醸成させ、10年後の区制100周年に向けた契機にした」としている。

そのほかにも、まち歩きツアーや中区の歴史をジャズや貴重な昔映像などで振り返るイベントなど、主催団体の個性が光る事業が盛りだくさんだ。

### 区民提案19事業も

また、これからの時代へなう子どもたちが、未来に夢や希望をもてるように90周年に関わる事業に思いを込める。

実行委が手がける記念事業だけでなく、区民や中区内で活動する団体からの19におよぶ提案事業も、この1年を通して区内の各所で実行される。

### 区民の協力が不可欠

今年、横浜の礎となった吉田新田が350周年、馬車道150周年、中区英町出身の小説家・大佛次郎生誕120周年と、様々な周年が重なる。実行委ではこれらの周年と連携しながら相乗的な盛り上がりを目指している。中区連合町内会長連綿協議会会長で、記念事業実行委員会の委員長を務める平山さんは「中区をあげて盛大にお祝いをしてまいります」と話している。

中区は1927(昭和2)年10月1日、横浜市の区制施行により誕生した5区(鶴見・神奈川・中・保土ヶ谷・磯子)のうちの1つ。横浜大空襲や戦後の接収などを乗り越え、観光地・商業地として横浜の発展を支え、現在にいたる。開港記念会館は関東大震災や接収などの危機を乗り越え、89(平成元)年に国の重要文化財に指定されている。

### 存在が大切な財産

100周年を迎える開港記念会館は、その名の通り横浜開港50周年を記念し、市民の寄付金で創建された。横浜を代表するこの建物は中区の公会堂の役割も兼ねる。その趣は、開港の歴史を今に伝える語り部のよう。訪れる人に横浜、そして中区の魅力を感じてもらいたい。区民の大切な財産でもある。実行委では、記念事業を通して一人でも多くの区民にこの「大切な財産」を伝えたいとしている。

## 座談会

# 100周年へ

# まちづくり

スポーツ振興・多文化共生・NPOによる地域活動と、それぞれ異なるフィールドで活躍する3人が集い10年後の中区制100周年に向けたまちづくりについて語り合った。議論からは主体的なものごとに関わる大切さがみえてきた。(本文・敬称略)



右から吉野さん、大藪さん、角野さん

### 全ての子どもに居場所を

まず、中区の10年後のあるべき姿について、それぞれの考えや思いをお聞かせください。

吉野「子どもたちに夢を与える地域主体のサッカーチームをつくりたいと、1986年にY.S.C.Cを立ち上げた。そして、25周年の時に子どもも高齢者も一緒に活動できる施設の実現を掲げて今に至る。土地の有効活用としても、10年後にはスポーツを通して誰もが笑顔で1日を終われる場所があればいいと思う。そこが起点となってコミュニティも生まれると考えている」

角野「1990年代ごろまでは経済成長する社会状況であり、横浜もそのような経済状況を背景にまちづくりが行われてきた。しかし、パラダイムシフト(考え方や価値観の変化)が起こり、これまでのやり方での発展は難しくなってきた。市民

が必要。それはP.L.A.C.E.場所という意味だけでなく、大人が子どもとしっかり向き合うことで生まれる心の拠り所でもある。この取り組みは個人レベルでもできることだと思う」



吉野 次郎さん  
 1965年本牧生まれ。合型地域スポーツクラブ「Y.S.C.C.(横浜スポーツ&カルチャークラブ)」の理事長。運営するサッカーチームはJ3リーグに所属。子ども向けのサッカースクールなども展開する。

### 問題意識を持ち 地道に活動

あるべき姿を実現するために、どのような取り組みが必要でしょうか。

吉野「地域のサッカークラブとして、子どもたちが着の身着のまま参加できるサッカースクールも開いている。そこには、外国につながる子どもも、学校生活がうまくいかず転入してきた子どもも、参加者は多様。つまり、居場所にならなければならない。このような取り組みを着実に続けていきたい。課題は、活動をしっかりと継続するための場所がないこと。30年活動してきたが施設面の環境は変化していない」

大藪「外国につながる子ども単純な比較はできないが、外国につながる人が多く中区においては、もっと受け入れる環境をつくっていく必要があると感じる。この現状を改善するには同じコミュニティの一員という意識を、時間をかけて醸成していくしかない。10年間は短い、それを地道に続けていくことが大切だ」

角野「都市性と村性の共存。これからは生産性重視の都市性と直接的な人間関係で動く村性のバランスをいかに最適化して、サステイナビリティを担保していくかが問われると思う」



角野 渉さん  
 1983年山手町生まれ。一級建築士事務所「山手町建築設計事務所」代表。NPO法人「Hama Bridge」の理事を務める。

大藪「米国に25年住み3年前に帰国したが、帰国後に感じるのが人権意識の高さだ。外国につながる住民が1割を占める中区において、私たちが人権意識を高めたと思う。また、人権意識を育てていくためには、子どもたちが自尊心をしっかり持つような『居場所』が必要。それはP.L.A.C.E.場所という意味だけでなく、大人が子どもとしっかり向き合うことで生まれる心の拠り所でもある。この取り組みは個人レベルでもできることだと思う」



大藪 順子さん  
 1971年大阪生まれ。フォトジャーナリスト。米国の新聞社にフリーライターとして勤務。2002年よりフリーライターとして「STAND」性暴力被害者支援会と「顔」が反響を呼ぶ全米で講演会を開催。14年に帰国、中区在住。

角野「濱橋会では、生活に密着した大岡川と中村川の水質調査をするなど水質改善に向けた取り組みを進めている。また、2つの川を通じて一層求められている。その機能強化のために、区民との多様なチャンネルを持ち、区民の声を傾け、それらの声に対する説明責任を果たしていく必要がある。また、区民の声をくみ取り、区の政策に反映していく機能も求められていく。さらには、このような広聴機能を強化しようという、区民が区政に参画できるように、区民の区政参画を進めていきたい」

### 吉田新田完成 350周年

現在の中区中心部の礎となったのが「吉田新田」。350年前に釣鐘状の入海を石材材商・吉田勘兵衛が埋め立てた。横浜が開港の地となったのも、この新田があったからこそ。今年には完成350周年を振り返り、これからのまちづくりを考える契機として、様々なイベントが企画されている。

詳細は [ys350](#) 検索

### 馬車道 150周年

1867(慶応3)年に60フィート(約18.3m)の計画道路が整備されたのが馬車道の始まり。開港後、現在の関内周辺は外国人の居留地となり、外国人の要請を受けてつくられた。馬車が通ると「馬車道」と呼ばれるように。昨年、馬車道商店街協同組合主催で「記念ロゴ」コンペを実施するなど150周年に向け盛り上がりを見せている。

### 歴史語り継ぐ 周年の紹介

1867 横浜 2017  
**馬車道 150**  
 YEARS  
 BASHAMICHI  
 YOKOHAMA

広告・記事のお問い合わせは045・227・5050 中区・西区編集室へ